

当報告の内容は、報告者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」

(2016年度第2回(通算第5回)研究会)

Title: Typological Study on “Altaic-type” Languages (The 5th meeting)

日時：2016年10月1日(土)

Date/Time: 1st Oct. 2016

場所：AA 研マルチメディア会議室 (304)

Venue: Room 304 (Multimedia Conference Room), ILCAA

Language: Japanese

当日参加者: 14名

1. 蝦名大助 (AA 研共同研究員, 神戸山手大学)

「ケチュア諸語の関係節」

(要旨) ケチュア諸語 (Quechuan languages) では一般に、動詞を名詞化することによって関係節が作られる。名詞化以外の関係節形成法も認められるが (スペイン語の影響と考えられる)、本発表では名詞化による関係節化にしばって議論を進めた。

関係節化は、方言によって違いがみられる。まず、どの名詞化接尾辞が選択されるかについてであるが、クスコ・ケチュア語では、意味役割 (主語か非主語か) が関係している、と考えるとおおむね差し支えない (厳密には意味役割ともいえないが)。これに対し、文法関係によって決まるとされる方言もある。また、インバブラ・ケチュア語では異なる意味役割 (行為者か被行為者か) であろうが異なる文法関係 (主語か目的語か) であろうが同じ名詞化接尾辞が用いられる (Cole 1983)。ケチュア諸語では関係節化以外にも、いわゆる *concrete nominalization* (モノ名詞化) や *action nominalization* (行為名詞化) など、文法の様々な領域に名詞化が関わっているが、クスコ・ケチュア語の関係節化は *concrete nominalization* に近く、インバブラ・ケチュア語の関係節化は *action nominalization* に近い。

上記のクスコ・ケチュア語とインバブラ・ケチュア語の違いは、歴史的な経緯によって説明できる。すなわち、インバブラ・ケチュア語が位置するエクアドル (北部) では、ケチュア語が土着の言語に取って代わって母語化する際に、文法の単純化が起こったのではないかと考えられる。

また、主要部内在型関係節が存在する方言と、存在しない方言がある。前者と後者の違いは、必ずしも方言グループの違いや地理によっては説明できず、さらに要因を検討する必要がある。

ケチュア諸語は、文法構造においてアイマラ語族の影響を大きく受けているとされる。アイマラ語における関係節化についても考慮に入れる必要があるかもしれない。

2. 日高晋介（東京外国語大学大学院）

「ウズベク語の *-(a)r / -mas* は形動詞なのか？」

（要旨） *-(a)r/-mas* は、典型的な形動詞である *-gan* 系列形動詞とふるまいが異なることが確認できた。本研究では、先行研究での記述（生産性が低い（Kononov 1960: 239））に加え、副詞や項を保持しないこと、節名詞化できないこと、項や副詞的要素を取り込んで一語化している例があることを指摘した。したがって、*-(a)r/-mas* は、動詞的な力を保持する形動詞形成接辞ではなく、形容詞・名詞を派生する接辞として捉えることが妥当である、と結論付けた。

3. 山田洋平（東京外国語大学大学院）

「ダグール語の動詞 *aa*」

（要旨）ダグール語の動詞 *aa* には存在動詞、コピュラ動詞、補助動詞としての3つの用法がある。本発表では、この動詞 *aa* が他の一般動詞と較べ否定形や単純形（非過去形）をもたないといった差異があることを示した。その上で、補助動詞としての用法は、より文法化が進んだ結果生じた用法であり、形態的に独立語というよりは接辞として扱うほうが適当である可能性もあることを述べた。

この動詞 *aa* は中世モンゴル語の存在動詞 *a* に遡ると見られる。現代のモンゴル語族の諸言語ではこの動詞 *a* に由来する形式は文法化が進んで動詞的な屈折を欠いていたり、他の存在動詞に取って代わられたりしているのに対し、ダグール語はこの *a* に由来する動詞 *aa* を保持しているという点で「古風な特徴」を残していると言える。

報告者の報告後、今後の日程調整および報告者の依頼をおこなった。

文責：山越康裕